

鴉片を喫む美少年 国枝史郎

(日翻中短篇試譯 第三段)

3

「これ迄喫ったことはないのですか？」

「鴉片を喫うのは今日がはじめてです」

「なるほどそれでは煉れないはずだ……がそれなら鴉片なんか喫わない方がいいのですがね」

「こんな大戦争を起こす程にも、みんな喫いたがる鴉片なのですから、私も喫いたいと思ひましてね」

「そう、誰もがそう云ったような、誘惑を感じて喫いはじめ、喫ってその味を知ったが最後、みすみす廃人となるのを承知で、死ぬまで喫うのが鴉片ですよ。……全く御国の人達と来ては、鴉片中毒患者ばかりです」

「御国の人？ 御国の人ですって？ ……では ^{あなた} 貴郎 は外人なのですか？」
(しまった！)と僕は思ったよ。

とうとう化けの皮を現わしてしまった。

友よ！ 僕はね、八年もの間、この支那の国に住んでいるので、言葉も風俗も何も彼も、すっかり支那人になりきる事が出来、誰にも滅多に疑われなかったのに、自分からこの日は底を割ってしまい「お国の人」なんて云ってしまったのさ。

これには自分ながら愛想を尽かしたが、たとい身分を ^{なの} 宣ったところで、害になることもなかったのさ。

「実は僕は日本人なのさ」

こう云ってから漂流したことや、ずっとそのまま支那にとどまり、支那人生活をしていることなどを、すっかりあけすけに話したのさ。

「日本の武士？」と宋思芳は、ひどく好奇心に煽られたように云い、それからそれといろいろのことを——日本の武士は任侠的で、人に頼まれるとどんなことでも、引き受けるというのが本当かとか、日本の武士は剣道に達していて、強いというのが本当かとか、そんなことを質問した。

で、僕はみんな本当だと、そう云って宋思芳に答えてやった。

宋思芳はひどく考え込んだが、

「英国のやり口をどう思いますか？」と訊いた。

「勿論正当のやり口ではないね」

こう僕は答えてやった。

「グレーという英国人をご存じですか？」

「司令官ゴフの甥にあたる、参謀長のグレーのことなら、戦争以来耳にしています」

「大変もない怪物でしてね、あの男一人を殺しさえしたら、こう迄も清国は負けないのですよ。大胆で勇敢で智謀があって、まだ壮年で好色淫蕩で、女惚れさえするのです。でもエリオットとは仲が悪いのです」

そう宋思芳少年は云った。

「エリオットはどっちのエリオットなのですか？」

そう僕は訊いて見た。

「水師提督の方のエリオットです」

水師提督エリオットは、この上海の英国領事の、もう一人のエリオットの親戚なのだが、鴉片戦争が始まるや否や、印度及び喜望峰の兵、一万五千人を引

率し、軍艦二十六隻をひきい、大砲百四十門を携え、^{じょうかい}定海湾、

^{しゅうさん}舟山島、^{チャプー}乍浦、^{ニンポー}寧波等を占領し、更に司令官ゴフと計り、

海陸共同して進撃し、^{ウースン}呉淞を取り、上海を奪い、その上海を根拠とし、

揚子江を堂々溯り、^{チンチャン}鎮江を略せんとしている人間なのさ。

グレーというのは英軍切つての、謂うところの花形で、毀誉褒貶いろいろあるが、人物であることは疑いなく、この男の参謀戦略によって、英軍は連戦連勝し、清国は連戦連敗しているのさ。

僕達二人は鴉片を喫わず、永いことそんなような話をした。

その翌夜も翌々夜も、僕達二人は同じ鴉片窟で逢った。

宋思芳はだんだん鴉片を煉るに慣れ、追々鴉片の醍醐の味に、^{ちんめん}沈湎するようになると思われた。

僕はしばしば宋思芳に向かって、どういう素性の人間なのか、どこにどんな家に住んでいるのか、家族にどういう人達があるかと、そんなことを訊いて見たが、彼はいつもうまく逃げて、話をしようとはしなかった。

ところが次第に変な調子になった。

と言うのは宋思芳が僕に対して、思慕の情愛を示し出したのさ。

女が男を恋するような情を。

僕は同性恋愛者ではない。が、宋思芳が前に云った通りの、世にも珍しい美少年だったので、そういう彼のそういう情愛が、僕には不自然に感ぜられなかった。

中文試譯：

3

「你有吸過這個嗎？」我問。

「這是我第一次嘗試吸鴉片。」少年回答道。

「原來是這樣所以才不太會吸啊。……如果是這樣的話，我勸你還是不要吸得好。」

「就算在這種戰爭時期，大家還是趨之若鶩的吸著鴉片呢。就因如此我才更要吸看看。」

「沒錯，任誰都是受到了誘惑而開始吸食鴉片的。一旦知道了那種滋味，明知終會變成一個廢人，但到死都還是會繼續吸下去。鴉片就是這種東西。……真是的，貴國的人們都是鴉片的重度吸食患者呢。」

「貴國？貴國的人是什麼意思？……難道你是外國人嗎？」少年問到（不好了！）我不禁想到。

最終還是暴露了啊。

我的朋友啊！我長達八年的時間都住在*支那（外國人對中國的舊稱），不管是語言還是風俗民情，我都可以表現得像是一個中國人一樣。明明很少會有人懷疑我的身分，但經我這句「貴國的人們」，一下子就被對方識破了。

雖說很氣自己說溜了嘴，但想想就算坦白自己的身分，也不會有什麼損害。於是我坦白地說道：「其實我是日本人。」

一旦打開了話匣子，便把漂流過海的經過、一直在中國逗留的事、過著和中國人生活的事……等等，全都毫無保留的說了出來。

宋思芳像受到好奇心的驅使不禁問道：「那你是位日本武士嗎？」之後又接連問了很多的事。像是「日本武士都很有俠義精神，受到委託的話，不管是怎樣的事都會答應是真的嗎？」、「日本武士精通劍術，各個都身手不凡也是真的嗎？」等等的問題。而我都以「那些都是真的。」來回答他。

然後宋思芳在經過深思後向我問道：「那你怎麼看待英國的所作所為？」

「當然用的都不是些正當的手段呢。」我回答道。

「那你知道一位名叫做格雷的英國人嗎？」

「如果是說那位司令官臥烏古（Hugh Gough）的外甥，兼參謀長的格雷的話，我從戰爭開始以來一直都有聽到關於他的事蹟。」

「他還真是個不得了的怪物對吧。只要殺了那個男人，我們大清也不至於會輸得這麼慘了。雖說還年輕的他喜好荒淫的生活又好女色，但同時又是多麼的有膽量與機智。但傳言似乎他跟義律先生的關係不太好呢。」宋思芳說道。

「你說的義律先生是哪一位義律先生呢？」我試問道。

「是身為*水師提督（指揮一個區域的海軍指揮官）的那位義律先生。」

身為水師提督的義律先生，跟上海的英國領事館的另一位*義律先生（Admiral Sir Charles Elliot／查理·義律：1836年至1841年擔任英國駐華商務總監）是親戚。然而戰爭一開始後，他馬上就率領印度跟好望角一萬五千人的士兵，帶領十六艘軍艦跟四十門大砲，佔領了定海灣、舟山島、乍浦、寧波等地。爾後又跟臥烏古（Hugh Gough）司令官計畫好，連同海陸一同進攻。不僅取得了吳淞，也佔領了上海。更把上海當作根據地，堂堂正正地從長江逆流而上，佔領了鎮江。他就是這樣的一個人。

至於格雷完全就是英國士兵中的傑出份子，也可說是個明日之星。雖說毀譽褒貶都有，但單就能力來說無須多疑，透過這男人的戰略跟計謀，英方屢戰屢勝。而清朝則是連連吃下敗仗。

我們兩個都沒有在吸鴉片，而是像這樣聊了很長的一段時間。過了一晚又一晚，我們都像這樣在同個鴉片窟見面。

漸漸的宋思芳對於吸食鴉片越來越順手，並可說是越發沉溺於吸食的樂趣之中。而我常常試著向宋思芳問些，像是關於他是個怎樣的人、又是住在哪裡、住在哪種家裡、家裡又有哪些人等等的問題，但他總是能巧妙的轉移話題，逃掉這些詢問，所以我們總是沒能說到這些。

然而，漸漸的我們之間的氛圍變了起來。宋思芳開始對我釋出了愛慕之情。那種情感是屬於女性愛慕男性的情感。雖說我不是同性戀，但宋思芳就如我文章前段所述，是世間難得一見的美少年。所以他的這種愛意並不會給我帶來不自然的違和感。